

## 第10回仙台市いじめ問題再調査委員会 会議録

- 1 日時 平成30年11月4日（日）13：30～15：00
- 2 会場 仙台市役所本庁舎2階 第1委員会室
- 3 委員出席数 6名 ※野田委員が欠席

### 議事要旨

#### 1. 開会

- ・ 会議の公開・非公開について協議し、冒頭から公開とされた。

#### 2. 協議事項：答申案について

- 答申案中「再発防止に向けた提言」の中で、事案発生後の学校や教育委員会の対応（特に初動のあり方）や、第三者委員会による調査の進め方、調査の過程における遺族との情報共有のあり方などについても問題提起を行うべきではないか、という議論があり、そうした観点からの記述を追加する方向で一致した。
- 答申案の全体的な方向性について一致し、今後は、委員長による最終調整、各委員の確認を経て、報告書を固めていくこととした。

#### <主な意見>

##### —本事実を振り返って改めて感じること等—

- ・ 児童生徒からのSOSの出し方の教育、ということも言われているが、様々な理由でそうしたSOSを出すことが難しいお子さんもいる。生育環境なども含め、お子さん一人ひとりの状況を個別に考え、対応していく必要がある。
- ・ 「皆と違っているからいじめられても仕方がない、あるいは起きてしまう」といった考えから脱却すべきである。
- ・ （いじめや重大事態などの）責任を現場へ丸投げしてはならない。制度面も含め、できることを各主体がやっていくことが大切。
- ・ 今回の検証では複数のいじめを認定しているが、認定したいじめの数が多い、少ない、というのは問題の本質ではない。生育歴も含め、このお子さんが抱えていた苦しみ、全体像を把握することが重要である。
- ・ 学校環境における安全保持ということを考えた場合、何が児童生徒にとって安全なのか、教職員の感度、アンテナを高くしていく必要がある。
- ・ 宮城県は、1,000人あたりの不登校数が全国ワーストであるが、不登校がこれだけ多い、ということにもっと危機感を持つべき。これはいじめの問題にも密接に結びついている。
- ・ 多くの子どもにとって行きにくい、行きたくない、という学校というのは、本事実にも重なる（自死生徒は不登校をほのめかしていた）。
- ・ 仙台市の様々な教育の問題が、本事実では出てきている。
- ・ 本事実では、いじめを受けているというサインがいくつも出ており、不登校や自死の兆候な

ども見られていた。それに対し、驚くほど学校側は気づけていなかった。

- ・ 本事案における自死生徒の発達上の特性に関する対応に見られるように、学校現場での対応が、紋切型で表面的な判断でなされている。「このお子さんは発達障害だから」といった安易なラベリングで表面的に捉え、適切な対応がなされていない。むしろそれが偏見を助長した面がある。
- ・ いわゆる健康なお子さんにとっては居心地がいいのかもしれないが、何かしら問題を抱えたお子さんに対する個別的な対応ができていない。表見的、画一的、管理的な印象を受ける。
- ・ 一方で、学校の先生方の労働環境にも目を向けなければならない。1クラスの生徒数は、仙台市は改善を進めているようだが、依然として多く、先生方は日々の対応に汲々としている。他の先進国並みに、1クラス20人程度とするようなことも真剣に考えていくべき。こうしたことは、社会全体で取り組んでいくべき課題である。
- ・ 先生方の置かれた労働環境に目を向けなければならない。今の教員には、新しいことに取り組むエネルギーがない。先生の責任とするのではなく、教育体制の責任と捉えるべき。
- ・ 本事案では、いじめアンケート後の本人への聴き取りで、いじめの実態を把握することに失敗している。そうした聴き取りのスキル、方法論なども、学校側は対策を講じていく必要がある。
- ・ 今回の調査で強く感じるのは、学校や教育委員会の様々な取り組みについて、それが児童生徒の立場から見て実効性を持ち得ているのか、その検証がなされていないことである。いじめ防止対策をはじめとする各種の取り組みについて検証し、改善していくシステムが弱い。
- ・ 思春期の子どもにとって、先輩や同級生よりも、下級生からされることは、大きな心の傷になることが多い。本事案でも、自死生徒が2年生になり、下級生との関係が出てきて様々な事が起きる中で、壮絶な自信喪失に陥った可能性がある。
- ・ 学校内や学校外部との「情報共有」や「連携」ということが本事案におけるキーワードとしてあったが、学校関係者の捉え方が表面的で、実態は、単なる事務連絡、伝達にとどまっている。
- ・ 教員、子どもたちの人権意識を高めていくとともに、社会総がかりで取り組むことが必要。
- ・ 授業や学業に置き去りにされた子どもたちが切り捨てられていく、という現状への懸念がある。学歴至上主義の弊害、という側面も、今の学校現場には確かにあるのではないか。
- ・ 学校は、何よりも、全ての子どもにとって安全で楽しい場でなければならない。きれいごとと言われるかもしれないが、学校や教育の場では、きれいごとを通して欲しい。
- ・ 「安全な学校」をつくっていくことは何より我々大人の責任である。

### 3. 開会

以上